

## 五 聞き心配、聞き怖れ

信仰とは不動地に基くことである。不退轉に住することである。あやふやな不徹底な、若存若亡の幽霊みたやうなものでは、決して眞實に聞いたのではない。一たび目の覺めた者ならば、自分の罪惡に氣付いて驚き悲しむと共に善根を積みたいと努力する、而して内心に善と惡とを兩立さして、惡の退かぬのを見ては悲しみ、善の起るを見ては喜び、何れも之をあてにして、之から超越することが出来ぬ。そのため何時も、戦々兢兢々として、不安ならざるを得ない。所謂、罪福を信ずるとは是である。善にも惡にもびくつく此の心が、焉んぞ知らん、其のまゝ如來救済の目標であらうとは。我が善も及ばず我が惡も恐なしと、大悲に徹底した時、此心は安住を得て、最早何者にも動ぜぬことになる。善につけ惡につけ、共に喜び勇むことの出来ることゝなるのであります。

縁起のよしあしに只管氣を揉んで居る老爺さんが、大根蒔きに出かける途中、隣の娘に出遇ふた。「花ちゃん何處へ」「齒を虫が食うて痛むからお醫者へ……」。「何だいまくしい縁起でもない、大根蒔きに行くのに齒を虫が食ふなんて、大根の葉など虫に食はれてたまるものか、今日は止めて明日にせう」。翌日また出かけると、知合の男に出遇つて、「三世間話をして居ると、風が吹いて、其の男の手拭を肩から落した。拾つてやると男は、何氣なく「はぐかりさん」と云うて御辭儀する。老爺さんギツクリ癩に障つた。「エ、また縁起でもない。大根蒔きに行くに、葉ばかりとは何事ぞ。大根が葉ばかりで根が入らなんだら云何する。今日は見合せて明日にせう」また歸つた。翌日、今日は誰にも逢はねばよいがと思ふと、都合よく畑までは誰にも逢はなんだ。今日こそはとセツセと大根蒔きして居ると、村長さんが偶然通りかゝられた。

「八兵衛さん偉いお早いなア」。「ハイ有難う。村長さん今日は何も云うて下さるな、一生の頼みですが。一昨日は隣の花ちやんが、齒を虫が食ふといふのに出遇つて、大根の葉を虫に食はれては堪らぬと見合せ。昨日は隣村の男に手拭を拾つてやつて、はぐかりさんと云はれ、大根に根がなくては大變とて止め。今日は三度目、もう時機も後れたから、縁起でもないことを云うて下さるな、一生のたのみ……」。「八兵衛さんの御幣擔にも却つて愛嬌がある。今時分そんな事を云ふ者がありますか、そんな事は根も葉もない事ぢや」。「ナニ根も葉もない」。八兵衛さん怒つたの怒らないの。眞赤になつて、鋏も抛つたらし、種も蹴散らしてズンぐ歸つて了つた。「ヤレく今年は大根が目茶々々になつた。折角大根蒔いて根も葉もないで云何する、止めたく」とさ。随分變な老爺さん。

折角の御教の眞意も得ず、徒に罪福を信じて機嫌に陥るビクく者は、この老爺さんと好い仲間だ。恚うすれば自力、彼あすれば他力の。此の罪が此の障が云何の。喜ばれるの喜ばれぬのと、一言一事にびくつく者は、御慈悲も抛つて眈で逃出すことになる。讃岐の庄松曰く

庄松そのまゝ有の儘、國は讃岐で彌陀は見拔で。

自身は現に是れ罪惡生死の凡夫と目の覺めた時、疑なく慮なく彼の願力に乗ずることが出来る。聞けく、自己を空虚にして聞け。